

1930年代の唱歌遊戯・行進遊戯の教育的価値 ：女子体育振興会『女子と子供の体育』を手がかりとして

北村 桜（立教大学大学院）

本発表の目的は、1930年代における唱歌遊戯・行進遊戯の教育的価値が、女子体育の振興とどのような影響関係にあったのかを明らかにすることである。そのために、1936年6月3日に改正された「学校体操教授要目」の内容を検討し、多くの唱歌遊戯・行進遊戯作品を残した戸倉ハル（1896－1968）の論考に着目する。幼児教育を専門とした戸倉にとって、遊戯作品を子どもに教授することと、女子の身体を育成することがどのように結びついていたのかを検討する。

1936年6月3日、「学校体操教授要目」（文部省訓令第18号）の第2次改正が公布された。ここでは、身体の修練を重んじることが新たに強調されている。特に、『改正要目小学校体操科解説：走・跳・投・各種・球技』[1936]では、体育的目標を没却した指導が存在したことに対する反省があったことが見て取れる。さらに、1936年「学校体操教授要目」改正のうち、唱歌遊戯・行進遊戯における「基本練習」の新設は、1937年『文部時報』第577号において、女子の身体の修練を目的とするものであったことが示されている。

従来の研究では、この1936年「学校体操教授要目」改正に、戸倉の影響が強かったことが指摘されている。名須川[2004]によれば、戸倉は要目委員の一人として、教材の精選だけでなく、体育としてのダンス教育の基礎をつくるために唱歌遊戯・行進遊戯の項目に「基本練習」を新たに設けたのだという。だが、「基本練習」の導入は戸倉の意向だけでなく、文部省側による女子体育の振興という目的も影響している。身体の修練を重視した戸倉の見解を明らかにするためには、文部省が発表した「学校体操教授要目」改正に対する解説だけでは収まらない、同時代の戸倉の論考をさらに検討しなければならないだろう。

戸倉は1933年より東京女子高等師範学校に勤務する。1935年12月17日には、東京女子高等師範学校長・下村寿一（1884－1965）が会長、佐々木等（1891－1982）が専務理事となり、女子体育振興会が発足した。戸倉は佐々木を介して理事として女子体育振興会に所属する。佐々木によれば、女子体育振興会は文部省・内務省を後援とした半官半民的な組織であったという。具体的には、文部省体育課長の山川健（1892－1944）の協力を得るなど、公的な教育制度と組織活動の両面から確立されたようである。なお、女子体育振興会は、1941年に学徒体育振興会へ合流することとなった。

まず、女子体育振興会の雑誌『女子と子供の体育』の創刊号には、「一に女子と子供の体育の向上発展」が女子体育の目的であると示される。雑誌の刊行目的についても「真に我国女性の進むべきに準據し、女子の体格改善、女子の健康増進、女子体位の向上」に貢献することとされた。事実、専務理事の佐々木は、女子体育の目的を「母体としての健康体」の育成を目指すものとして位置づけており、「国家に有用なる子供」を生み育てる女性の身体の育成が体育の役割であるという見解を示している。これらの事実を鑑みれば、女子体育振興会および文部省における女子体育の目的は、国家を支える女性を創出することに集約されているように見える。

次に、1936年9月の『女子と子供の体育』の中で、戸倉は、運動の効果の高い歩法を取り入れることで、活動的な教授内容になるよう目指したことを示す。なお、戸倉が唱歌遊戯・行進遊戯について「決してダンスや舞踊の教育をするものではない」と述べたことは、身体の修練を重んじた「学校体操教授要目」改正の内容と共鳴している。他方で、注目すべきことに、戸倉は、体操科における唱歌遊戯・行進遊戯は、あくまでも子どもの身体や精神を「調和的に発達」させるものであるとした。そのため、戸倉は、子どもの「自発活動」を重んずる教授を目指し、注入主義的に子どもに教材を教授することを批判している。したがって、戸倉は、運動効果の高い「基本練習」を取り入れながらも、子どもの「自発活動」を促す教授内容を考案したことから、情操陶冶を重視したと考えられる。ここから示唆されることは、戸倉自身が身体の修練を重視したことには、国家を支える女性を創出するという女子体育の目的とは距離を取り、あくまで一個人の人間として子どもや女子を捉えるという体育観の萌芽が見られるということではないだろうか。

発表の手順は以下の通りである。まず、1936年6月3日「学校体操教授要目」（文部省訓令第18号）の改正の内容を検討する（1）。次に、東京女子高等師範学校において1935年に発足した女子体育振興会の雑誌『女子と子供の体育』の論考を確認する（2）。戸倉が女子体育振興会の理事であったことに鑑み、戸倉の女子体育の振興に対するまなざしを紐解く（3）。最終的には、唱歌遊戯・行進遊戯によって、子どもの「自発活動」を重んじた戸倉の遊戯観から、当時の女子体育の振興の潮流の中での戸倉の位置づけを標定する（4）。

〈主要参考文献〉

名須川知子『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房、2004年。